

# 西之内町地車新調実行委員会通信

## 西之内町新調地車

### 彫刻の物語背景と紹介（10）

#### 秀頼の決意

二月も終わりに近づき、春の足音が間近に感じられるこのごろ、西之内町の皆様におかれましては、ますますご発展のこととお慶び申し上げます。

今回も新調地車の彫り物の場面について少しご紹介します。主題目である大坂の陣は、家康がとにかく難癖をつけて豊臣家の力を衰弱させることを目的としたもので、戦国期最後の合戦でもあります。その合戦に至る一つの要因として、二条城の会見があります。家康が秀頼の持つている資質に脅威を覚えたためではないかと推測されています。秀頼の当日の振る舞いは、後の文献では記載されておりますが、徳川家びいきの目線で書かれているため、真相は不明です。

その会見後に家康は方広寺鐘銘事件を企てるのです。慶長19年（1614）8月3日、京都の方広寺において大仏開眼供養会が行われることになりました。する

2022年  
2月号

新調通信に関する御問い合わせ  
西之内町公民館  
072-444-7712



方広寺釣鐘（現存）

と、家康の懷刀といわれる天台宗僧侶の光坊天海は、その運営方法に注文をつけます。供養会において天台宗の僧侶を上座の左班にするよう、豊臣方へ申し入れたのです。前回の供養会では、高野山の木食応其の主張を受け入れ、真言宗を左班にしたのでした。しかし、今回は供養導師が天台宗の妙法院なので、天台宗の僧侶を左班にす るようというのが天海の言い分。問題は、天台宗と真言宗のいづれが上座に座る

まで言いだします。面倒なことに、家康も堂供養と大仏の開眼供養を同時に実施するのか尋ねたため、問題はさらに複雑化していきます。

この問題に対処したのが、片桐且元です。7月18日、且元は家康のいる駿府城に赴き、供養の日程を午前と午後で実施するという案を提示し、家康の要望に応えようとします。しかし、天海の主張である仁和寺門跡の排除は拒否しました。ところが事態は收拾しません。今度は家康の信頼が厚い臨済宗の僧侶・金地院崇伝が現れます。

崇伝は、開眼供養と堂供養を2日に分けるべきであると申し入れます。これは崇伝の考え方よりも、実質的に家康の意向を受けたものであつたといえましょう。7月21日、家康は大仏鐘銘に「関東に不吉の

かということだったのです。また天海は、仁和寺門跡が供養会に出席することを強く非難します。そして、天台宗の僧侶が左班でなければ、出仕しないとまで言います。面倒なことに、家康も堂供養と大仏の開眼供養を行いたいと、これまでの主張を繰り返すだけになります。こうなると、話は平行線をたどるだけです。

家康は主張が変わることなく、再び大仏開眼供養と堂供養を別の日に行うように迫ります（『駿府記』）。

そうしているうちに、方広寺鐘銘事件が起こったのです。方広寺の鐘銘は、東福寺の長老・文英清韓（ぶんえいせいかん）が撰したのであります。そこに「國家安康」の文字の2文字が分かれているということで、家康は強い不快感を示します。ただ、これを問題視したのは林羅山であつて、ほかの五山僧はさほど問題とは思わなかつたようです。さらに、それ

語」があり、しかも上棟の日が吉日でないと立腹したことを豊臣方に伝えます（『駿府記』）。この時点において、立腹した具体的な内容は豊臣家にはまだ伝わ

だけでは終わらず、方広寺の鐘銘には、「君臣豊樂」の文字が刻まれていただけます。この言葉は、豊臣家が家臣とともに繁栄していくことを意味すると考えられました。家康の怒りは、さらに増幅したといわれております。この一連の流れが方広寺鐘銘事件の発端です。

方広寺鐘銘事件を経て衝突に至つた大坂の陣ですが、秀頼はここで大将としての風格を見せることとなります。

大坂冬の陣が終わりかけていた

頃、淀殿は徳川の大軍に囲まれ、鉄砲を連日撃ちこまれたために弱気になつていきました。

「もし秀頼に何かあつたら困る。人が住まない野原に移住してでもいいので、どうにかして秀頼の安全を確保しないといけない。」

この発言を大野治長から聞いた秀頼は、淀殿の意見を無視します。

「女は思慮がないのでそもそも思うだろう。私は敵がもし総攻撃してく

れば、自分も城外に出て華やかに戦をして後世に名を残すようにした

まるものではない。兵の心を一つに



南光坊天海

(明智光秀と同一人物説もある)

するかしないかだ。これを味方の兵達に触れ回れ。」

## 新調地車の彫り物 進捗報告

今後の予定では、枠合の芯板、奥板の荒彫りが3月下旬までかかるとのこと。次の

治長が諸大将を集めてこのことを話すと、皆は感激して涙を流しました。

「君君たれば臣臣たり（主君に徳があれば家臣は忠義を尽くす）。誰が命を惜しむものですか。敵が総攻撃をしかけてきたら一矢を放つて速やかに討ち死にします。」

このことにより豊臣軍の士気が上がり、結果、冬の陣の和睦に際して有利な展開となるのです。『難波戦記』途方もない難癖から起つた合戦に戸惑いながらも、大将となつた秀頼の奮起の場面を、新調地車に表現しております。

とも前例が無く、参考となる錦絵や武者絵などの資料に欠けており、構成の検討には時間を要しました。しかし、兵主神社に伝わる話を紐解くと意外な発見もあります。改めてこの地域の歴史に興味を持つていただけるような構成にしたいと思つております。

素削り、刻みの作業では、大脇、脇障子といった迫力のある部分を手掛けております。脇障子については部材も大きく、作業のやりにきい部位のようになりますが、職人方が工房の中で巧みに固定具などを活用している姿も、見学していく感心するところでもあります。

そして後世に名を残すようにしたいと考えている。戦は数の多寡で決まるものではない。兵の心を一つに

2月になり、大屋根・小屋根の枠合の下絵から荒彫りに着手しております。枠合の部分は、兵主神社の伝説や祭神の絵巻物から場面を選択し、物語から人物の配置などを構成しております。各場面

ととなつております。また、その他、主屋根のとある部分に、兵主神社の重要文化財を彫り込む予定で、既にその下絵は完成しております。どこに入れるかはここで言えませんが、お楽しみにしていただければと思います。

## 新調地車の装飾品

### 進捗報告

工程は、車板部分か虹梁部分に着手する工程で、既にその下絵は完成しております。どこに入れるかはここで言えませんが、お楽しみにしていただければと思います。

## 交差旗

### 進捗報告

装飾品の一つである交差旗の刺繡の出来具合の確認を行いました。刺繡も金糸、銀糸を巧みに組み合わせてメリハリをつけ豪華さが際立つ仕上がりになつております。また、刺繡の仕上がりも重厚なものとなつており、職人の高い技術力を感じさせてくれます。町名旗、幟についても同様の仕様で制作しており、共に完成時の期待が膨らむ仕上がりとなつております。

その他、纏、吹き散りについても完成に向けて順調に作業が進んでおります。装飾品の完成時には内覧会の開催を予定しております。皆さまにぜひご覧いただ

